翻訳と注解

アルコーンの本質（ナグ・ハマディ 写本 II,4）

大 貫 隆

1 写本

ここに訳出する『アルコーンの本質』は，1945年に上エジプトのナグ・ハマディで発見されたコプト語『ナグ・ハマディ文書』の第二写本に，『ヨハネのアポクリュフォン』，『トマスによる福音書』，『フィリポによる福音書』に続いて第四文書（86頁20行から97頁23行）として収められているものであり，その後にはさらに『この世の起源について』が続いている。本文の欠損はそれぞれの頁の最後の数行の行頭（偶数頁）あるいは行末（奇数頁）の最大約9文字分にとどまる。それも頁を追うごとに少なくなってゆくから，写本IIに収められた文書の中では本文の保存が良い方に属する。

2 文学的様式・内容・構成

『アルコーンの本質』という表題は古代の慣例に従って文書の末尾（97頁22-23 行）に後書きされている。“アルコーン”とは目に見える宇宙的世界全体を支配し，人間 ― とりわけ本書を生み出したグノーシス主義者（§37の「王なき世代」参照）たち ― をその中に閉じ込めていると考えられた勢力のことである。文学的な様式の上では，彼らの本質について尋ねた弟子の質問に対して，一人の教師と思われる者が解答を与えるという体裁を取っている（§1）。

しかし，全体の構成は，子細に見ると，決して分かりやすいものとは言えない。それには二つ大きな理由がある。

(1) §2から§18までは，すでにアルコーンたちの生成と存在を前提にした上で，むしろ彼らの頭領サマエールの不遜な思い上がりとわざ，すなわち，最初の（心魂的）人間アダムの創造からノアの洪水までを，創世記1-6 章に対するグノーシス主義的な再解釈の形で物語る。この部分の語り手は匿名であり，神話に登場する存在はすべて三人称で指示される。ところが，§19（93,13）からは，その直前（§16-18）まで三人称・女性・単数で指示されてきた“ノーレア”が突然一人称・単数の「私」で語り始め，彼女が天使エレレートから与えられた啓示を第三者に伝える体裁に変わる。その啓示は終始エレレートとノーレアの間の対話の形で開陳される。内容的には，ここで改めてアルコーン（支配者）たちの生成の次第から説き起こされ（§21参照），最後は救済論と終末論的な予言（§33-39）をもって終わる。このように話が前後するために，例えばサマエールの思い上がりの場面が重複する結果（§2,23,26）になっている。神話の展開としては，ほぼ§21-26 → §4-18 → §32-39 の順で読まないと話の筋が通らない。

(2) いわゆるプレーローマ界（光の世界，§29：“オグドアス”）がアルコーンたちの支配領域の

上に，それから一つの「カーテン」（§22,28）で仕切られる形で存在し，そこに“万物の父（神）”（§6,16,30,39），“不滅性”（§2,4,5,6,20,22），“ピステイ ス・ソフィア”（§3,22,24,26,28,29），“霊（聖霊，処女なる霊，真理の霊）”（§6,17,18,20,33,36），“エレレート”（§18,20,22），“完全なる（真実なる）人間”（§10,36），“あの種子（子孫）”（§33,38）“御子”（§39）が属する。しかし，そのことは暗黙の内に前提されるに留まり，これらの神的な存在全体の相互的な組成については何の説明も行われない。

この内（2）については，本書がアルコーンの本質という問題に主題を限定しているために，それと直接係わらないプレーローマ界の組成の問題は省略された，という説明が可能である。他方，（1）の困難は，早くから多くの研究者を，われわれの文書の背後に複数の資料を想定する仮説に導いた。と同時に，それらの資料に対する編集がどのように行われているかの分析も繰り返し試みられてきた。

3　資料と編集

現在は，少なくとも二つの資料を想定するのが定説である。一つは創世記1-6 章をタルグーム的にパラフレーズする資料で，§2-（14）18の背後に想定される。もう一つはノーレアに対するエレレートの啓示講話で，ほぼ§19-37 の背後に想定される。そして，これら二つの資料を繋ぎ合わせた編集者は本来ならば，後者において啓示の受け手として一人称・単数の「私」で登場していたノーレアを，三人称・単数に変更して前者に合わせるべきであったのに，粗忽にもそうしないでそのまま放置したのだと説明される（Schenke）。他方，われわれの文書の冒頭に序文を，結びには終末論的予告（§36-37）と頌栄（§39）を付すことによって全体を枠付けしたのは，その枠の部分に新約聖書的な語彙が集中的に現れることが端的に証明する通り，間違いなくキリスト教徒 ― 正確にはキリスト教グノーシス主義者 ― である。しかし，この最終編集者と前記の二つの資料を結合した編集者を同一人物と見做すか（Kasser），あるいは，両者を区別して，キリスト教グノーシス主義による最終的な編集以前に，ユダヤ教グノーシス主義による編集段階を想定するか（Barc）については研究者の意見が分かれている。また，キリスト教グノーシス主義による編集的な加筆を，前述の枠組み部分を越えてさらにどこまで認めうるか，についても同様である。

4　グノーシス主義内部での系譜

次に，われわれの文書は多様なグノーシス主義の展開の中のどの系譜に属するであろうか。この点についても，セーツ派，バルベロ派（Schenke），オフィス派（Bullard），ヴァレンティノス派などさまざまな説が提案されてきた。しかし，前述のように，プレーローマ界の組成の叙述が省略されているために，われわれの文書を既知の他のグノーシス主義神話と突き合わせることには自ずから限界があり，厳密な系統化は不可能である。その上で二つだけ顕著な事実を挙げれば，まず，“万物の父の意志”の及ぶ範囲に注意したい。すなわち，ヤルダバオートとアルコーンたちの悪しきわざも，繰り返し「万物の父の意志において」起きたこととされている（§6,7,30）。ここでは，グノーシス主義本来の二元論が緩和されて，ヴァレンティノス派においてもそうであったように，言わば一元論化されてゆく方向性が否定し難いように思われる。いま一つ顕著な事実は，同じ写本（NHC II）ですぐ後に続く『この世の起源について』との間に，明瞭かつ大幅な並

行関係が存在することである。その中でもとりわけ著しいのは，プレーローマとその下の世界を区切る「カーテン」の「影」から可視的世界とその支配者たちの成立を説明する記事（§22）である。これは『この世の起源について』の冒頭部分（§2-5）に酷似している。その他の並行関係をすべて列挙すれば，この解説の７）に付した一覧表のようになる。神話論的には『この世の起源について』の方がわれわれの文書よりも発展した形と見るのが定説である。しかし，それは必ずしも『この世の起源について』がわれわれの文書を下敷きにして直接利用しているということではなく，むしろ二つの文書の背後に共通の資料を想定するのが多数意見である。

5　成立年代・場所・原語

われわれの文書が，他の多くのナグ・ハマディ文書と同じように，もともとギリシア語で書かれたものであることは，本文中に無数に現れるギリシア語の借用語から明らかである。成立年代は，コプト語のナグ・ハマディ写本 II 全体が，定説によれば後４世紀の前半に筆写されたものであるから，この年代を下限とすることになる。上限については，R・A・バラード（Bullard）が，96,11-14に新プラトン主義との並行が認められることを根拠の一つとして，後３世紀を提案している。B・バルク（Barc）は，ユダヤ教グノーシス主義による編集を後２世紀の前半，キリスト教グノーシス主義による最終編集を同後半に設定するが，明確な根拠があるわけではない。成立の場所としては，バラードが，§5 に「アルコーンたちの顔は獣」とあるのを，エジプトにおける動物神崇拝と関連付けて，エジプト説を提案している。いわゆる「生活の座」としては，グノーシス主義的共同体の内部向けの教育活動を考えるのがもっとも順当であろう。すでに述たように，神話の全体ではなく，その途中から説き起こして解答とするやり方は，対外的な宣伝文書には馴染まないからである。

6　翻訳底本・参照文献・略号

翻訳に当たっては次の校訂本の内，原則として2）を底本とし，必要に応じて随時 1）と3）も参照している。

1)　R.A.Bullard, The Hypostasis of the Archons, The Coptic Text with Translation and Commentary, with a contribution by Martin Krause, Berlin 1970 (PTS 10).

2)　R.A.Bullard/B.Layton, The Hypostasis of the Archons, in: B.Layton (ed.), Nag Hammadi Codex II,2-7, vol.1 , Leiden 1989 (NHS XX), pp.219-259.

3)　B.Barc, L'Hypostase des Archontes, traité gnostique sur l'origine de l'homme, du monde et des archontes (NH II,4), Québec/Louvain 1980 (BCNH 5).

参照した欧米語の翻訳と研究文献および本稿の訳注でのそれぞれの略号は次の通りである。

Bl　=　上記の校訂本 1）に付された英語の対訳

Br　=　上記の校訂本 3）に付されたフランス語の対訳

F　=　K.M.Fischer, Besprechung zu R.A.Bullard, The Hypostasis of the Archons, Berlin 1970 (PTS 10), ThLZ 97 (1972), Sp.125-129.

Ka[1] = R.Kasser, L'Hypostase des Archontes, Bibliothèque Gnostiques X, in; Revue de

Théologie et de Philosophie 105 (1972), pp.168-202.

Ka² = R.Kasser, L'Hypostase des Archontes, Propositions sur quelques lectures et reconstitutions nouvelles, in: M.Krause (ed.), Essays on the Nag Hammadi Texts in Honour of Alexander Böhlig, Leiden 1972 (NHSIII), pp.22-35.

Kr = M.Krause, Das Wesen der Archonten, in: W.Foerster (Hg.), Die Gnosis II, Zürich/Stuttgart 1971, S.46-62.

L¹ = R.A.Bullard/B.Layton, The Hypostasis of the Archons, in: J.M.Robinson (ed.), The Nag Hammadi Library in English, Leiden/New York 1988 3, pp.161-169.

L² = B.Layton, The Reality of the Rulers, in: B.Layton, The Gnsotic Scriptures, New York 1987, pp.65-76.

L³ = 上記の校訂本 2) に付された英語の対訳

N¹ = P.Nagel, Grammatische Untersuchungen zu Nag Hammadi Codex II, in: F.Altheim/R.Stiehl (Hgg.), Die Araber in der Alten Welt, Berlin 1969, Bd.5/2, S.393-469.

N² = P.Nagel, Das Wesen der Archonten, Wissenschaftliche Beiträge der Martin- Luther-Universität 1970/6, Halle 1970.

S = H.M.Schenke, Das Wesen der Archonten, Eine gnostische Originalschrift aus dem Funde von Nag Hammadi, ThLZ 83 (1958), Sp.661-670; Nachdruck: J.Leipoldt/H.M.Schenke, Koptisch-gnosische Schriften aus den Papyrus-Codices von Nag Hammadi, Hamburg-Bergstedt 1960, S.68-78.83-84.

翻訳本文で用いられる括弧記号の意味は次の通りである。

[ ] = 損傷された本文を校訂者または訳者が推定復元した読み

〈 〉= 原本の写字生が書き落としたと思われる文または単語

≪ ≫= 原本の写字生が重複して書き写したと思われる文または単語

( ) = 原本がギリシア語を借用していることを示すため，あるいは文意を取り易くするために訳者が行った補充

なお，パラグラフ（§）の区分は B.Layton （L3）の提案に従っている。それとは別に原本のページ数と行数も本文の中に挿入して表記した。例えば【86】は写本の第86ページを表し，それに続いて (5), (10), (15), (20), (25), (30), (35) とあるのは，それぞれのページの第 5行，第10行・・・の意味である。しかし，コプト語本文の語順を日本語の訳文に保持することはもとより不可能であるから，いずれの表示も大方の目安を示すものに過ぎない。

7 『この世の起源について』(NHC II,5) との並行箇所一覧

以下の一覧表は H.-G.Bethge, "Vom Ursprung der Welt": Die fünfte Schrift aus Nag-Hammadi-Codex II, Diss.Masch., Berlin 1975, 1.Teil, S.92-120 をベースにしながら，それをさらに精密化したものである。

『アルコーンの本質』
86,27-87,4 (§1)
87,23-26 (§5)
87,26-88,5 (§5)
88,11-17 (§6)
88,19-24 (§6)
88,24-26 (§7)
88,26-32 (§7)
89,3-11 (§8)
89,11-15 (§8)
89,16-17 (§8)
89,17-23 (§9)
89,23-31 (§9)
89,31-90,10 (§9)
90,13-91,3 (§9-10)
91,3-11 (§10)
91,5-7 (§10)
91,13-15 (§11)
94,4-13 (§22)
94,13-15 (§22)
94,16-19 (§22)
94,19-20 (§23)
94,21-34 (§23-24)
94,26-32 (§24)
94,34-95,4 (§25)
95,4-8 (§26)
95,13-18 (§27-28)
95,19-22 (§28)
95,22-25 (§28)
95,26-31 (§29)
95,31-34 (§29)
95,31-96,3 (§29)
96,3-8 (§30)
96,3-15 (§30)
97,10-13 (§38)

『この世の起源について』
103,8-20 (§23-25)
112,29-113,5 (§67)
114,29-115,3 (§78-79)
115,11-15 (§81-82)
120,17-25 (§110)
115,28-30 (§84)
118,18-24 (§102)
116,20-25 (§89)
115,30-116,8 (§85-86)
114,7-15 (§75)
116,8-20 (§87-88)
116,25-117,15 (§90-94)
118,24-119,6 (§103)
119,6-120,6 (§104-106)
120,25-121,13 (§111-112)
120,10-12 (§108)
117,15-18 (§95)
98,11-23 (§4)
99,8-13 (§6)
100,1-10 (§10)
100,29-33 (§14)
103,8-32 (§23-26)
107,34-108,5 (§42-43)
101,9-102,7 (§15-17)
103,8-20 (§23-25)
103,32-104,1.10-11 (§27)
104,17-22 (§29)
104,6-10 (§27)
104,35-105,11 (§32)
104,26-31 (§30)
106,5-16 (§34-35)
99,2-8 (§6)
106,19-29 (§36)
125,34-126,4 (§142)

§1【86】(20) 支配者（ἐξουσία）たちの本質（ὑπόστασις）について。真理の父の霊（πνεῦμα）において，あの偉大な使徒（ἀπόστολος）が闇の支配（ἐξουσία）[1]について，われわれに告げた。すなわち，「わたしたちの戦いは肉（σάρξ）や［血］[2]に対するものではなく，むしろ（ἀλλά）世（κοσ[μος]）の支配者（ἐξουσία）たちと (25) 邪悪（πονηρία）の霊力（πνευματικόν）に対するものである」と。[3] ［私が］これを(君に書き)送っ［たのは］[4]，君が私に支配者（ἐξουσία）たちの本質（ὑπόστασις）ついて尋ねているからである。

§2　さて（δέ），彼らの大いなる者は盲目である。［彼の］権力[5]と彼の無知［と彼の傲］[6]慢さの［故に］[7]，彼は彼の［権力］[8]に任せて，［こう］言った，(30)「私こそが神であり，［私の外には］[9]誰もいない」と。[10]

彼がこう言った［とき］，彼は［万物に］[11] 対して罪を犯したのである。そして，この言葉は【87】“不滅性”のもとにまで届いた。すると（δέ），見よ，その“不滅性”のもとから，或る声が到来して，こう語った，「サマエールよ」 ― とはすなわち，盲目の神という意味である ― 「おまえは誤っている（πλανᾶσθαι）。」[12]

§3　彼の考えは盲目になった。[13] 彼は(5)彼の力を送った。すなわち，それは彼が口にした侮辱のことである。[14] 彼はその後を追って（διώκειν），カオス（χάος）と彼の母なる深淵にまで下って行った。すなわち，それ（深淵）はピステイ ス・ソフィア（Πίστις Σοφία）によって生じたもので，彼（サマエール）の母のことである。[14] 彼女は彼の息子たちをおのおのその力に応じて（κατά），(10)上なるアイオーン（αἰών）の像（τύπος）に似せて（κατά）立てた（καθιστάναι）。何故なら，（肉眼に）明らかなるものは隠されたものの中から見出されたのであるから。[15]

§4 “不滅性”が水の領域（μέρος）を眺め下ろした。（すると）彼女（不滅性）の像が水の中に現れた。すると，闇の支配者（ἐξουσία）たちはそれに恋情を抱いた。(15) しかし（δέ），彼らの弱さに故に，水の中に現れたその像をつかむことができなかった。何故なら，心魂的（ψυχικός）なる者たちには霊的（πνευματικός）なるものをつかむことはできないからである。何故なら，彼らは下からの者たちであるが（δέ），それ（像）は上からのものだからである。[16]

§5　(20) このため，“不滅性”がその領域（μέρος）を眺め下ろした。それは，それ（不滅性）が，父の意志において，万物を光と結合するため（ἵνα）であった。アルコーン（ἄρχων）たちは協議（συμβούλιον）して，こう言った，「集まれ，(25) われわれは土の塵（χοῦς）から一人の人間を造ろう」[17] と。彼らは彼らのこしらえ［物］[18]を造った（πλάσσειν）が，それは全くの土の人間であった。

[19]しかし（δέ），アルコーン（ἄρχων）たちの［身］体（[σῶ]μα）は女〈でもなければ〉，［男でもな］く[19]，その顔は獣（θηρίον）である。彼らは (30) 土の［塵（χοῦς）］を取り，彼らの身体に似せて（κατά），また，水の中で［彼らに］現れた神の［像］に従［っ］て（κ[ατ]ά），一人の人間を形造った（πλάσσειν）。

彼らは言った，「［集まれ，］[20]われわれはわれわれが造ったこしらえ物（πλάσμα）の中に彼[21]

をつなぎ止め［ようではないか］[22]，(35) そ［れは］[23]それ[24]が彼の双生の［像］を見るようになる［ためである。］[25]［[35]　±9　］【88】（そして）われわれはそれをわれわれの造った物（πλάσμα）の中に捕らえよう。」その際，彼らは彼らの無力さの故に，神の力（δύναμις）のことを考［え］（　　）なかった。それから彼（サマエール）は彼の顔に息を吹き込んだ。[26] すると，その人間は心魂的（ψυχικός）な者となり，（5）何日も地の上に（あった）。だが，彼らには彼らの無力さの故に，彼を立て起こすことができなかった。彼らはまるで旋風のように執拗に（προσκαρτερεῖν），彼らに水の中で現れたあの像を待ち伏せた。だが（δέ），彼らはその力 (10) がどんなものか知らなかった。

§6　さて（δέ），これらすべてのことは，万物の父の意志によって生じたのである。これらのことの後，“霊”（πνεῦμα）が地上の心魂的（ψυχικός）人間を眺めた。そして，“霊”（πνεῦμα）がアダマンテイ ネー（ἀδαμαντίνη）[27]の地から到来した。それは下ってきて，彼（心魂的人間）の中に宿った。(15) その人間は生ける者（ψυχή）となった。[28]

それは彼の名前をアダムと呼んだ。何故なら（γάρ），地の上で彼が動くのが見られたからである。或る声が“不滅性”からアダムのもとへ，彼を助ける（βοήθεια）ために到来した。そして，アルコーン（ἄρχων）たちは (20) 地のあらゆる獣（θηρίον）と天のあらゆる鳥を集め，アダムのもとへ連れてきた。それはアダムがそれらを何と呼ぶかを見るため，彼に鳥たちとあらゆる動物たちにそれぞれの名前を付けさせるためであった。[29]

§7　彼らはアダムを捕らえて，(25) 楽園（παράδεισος）に置［いた。］それは彼に［それ（楽園）を］耕させ，守らせるためであった。[30] それからアルコーン（ἄρχων）たちは［彼］に命じて言った，「楽園（παράδεισος）の中にある［すべての］木からおまえは食べるであろう。しかし（δέ），(30) 善と悪の知識の木［からは］食べてはならない。また，それ［に触れてもなら］ない（οὐδέ）。何故なら，おまえたちがそ［れから］食べる日には，おまえたちは必ず死ぬであろうから。[31]」

[32]［[33]　±8　］彼らは知らない，何［[34]　±8　］彼に。[32] むしろ（ἀλλά），父の意志において【89】彼らはこのように語ったのである。それは彼が食べて[33]全く物質的（ὑλικός）な存在となっても，彼らを見破ることになるためであった。[33]

§8　アルコーン（ἄρχων）たちは互いに相談して，言った，「集まれ，（5）われわれはアダムの上に忘却をもたらそう。」[34] それで彼は眠りに落ちた。さて，忘却とは無知のことであり，それを彼らは彼の上にもたらしたのである。[34] それで彼は眠った。[35] 彼らは彼の脇腹を生ける女のように開いた。[36] そして，彼の脇腹に彼女の代わりの肉（σάρξ）を詰めた。[37] (10) すると，アダムは全く心魂的（ψυχικός）な者となった。そして，霊的（πνευματική）な女が彼のところにやって来た。彼女は彼に語って言った，「立ちなさい，アダムよ！」と。すると彼は彼女を見て言った，「あなた（二人称・女性・単数）が私に命を授けてくれた方です。(15) あなたは生けるものの母と呼ばれることでしょう。[38] 何故なら，彼女（三人称・女性・単数）が私の母なのですから。彼女は医者であり，女であり，産んだ者である。」

§9　だが（δέ），支配者（ἐξουσία）たちが彼らのアダムのところにやって来た。しかし（δέ），彼らは彼（アダム）の双生の像（霊的な女）が彼と話しているのを見たとき，(20) 大いに心を乱し，彼女に対する恋情に陥った。彼らは互いに言った，「集まれ，れはわれわれの種子（σπέρμα）を彼女の上にふりかけよう。」彼らは彼女を追いかけた（διώκειν）。しかし，彼女は彼らを彼らの無恥と (25) 盲目さの故に嘲笑した。[39] それでも彼女は彼らと一夜を共にした。[39] 彼女は彼女の影を，［すなわち，］彼女の［似像を］[40] 彼らの下に横たえたのである。そして彼らは自分たち自身をひどく汚すことになった。[41] そして彼女の声の認証（σφραγίς）を汚した。それは彼らがやがて彼ら自身を，(30) 彼らのこしらえ物（πλάσμα）と彼らの似像の中でさばく（κατακρίνειν）ことになるため（ἵνα）であった。

しかし（δέ），霊的（πνευματική）な女が蛇[42]の，とはすなわち，教示者［の姿で］やって来た。そして［彼らに教］えて，こう言った，「［彼が］おまえたち［に告げ］たことは何か。『［楽］園（[παρά]δεισος）にあるすべての木から (35) おまえは食べるであろう。しかし（δέ），【90】善と悪［の知識の木か］らは食べてはなら［ない］』ということか。」

肉の（σαρκική）女が言った，「彼は『食べてはならない』とだけ言ったのではなく（οὐ μόνον, ἀλλά），『それに触れてもならない。[43] 何故なら，おまえたちは，それから食べる日には，(5) 必ず死ぬことになろうから』[44]とも言いました。」

すると教示者である蛇は言った，「おまえたちは決して死ぬことはない。[45] 何故なら（γάρ），彼がそうおまえたちに命じたのも，妬んでいる（φθονεῖν）からなのだ。むしろ（μᾶλλον），おまえたちの目が開くことになるであろう。そして，おまえたちは (10) 善と悪とを知る神々のようになるだろう。」[46] それから，教示者がその蛇から取り去られた。彼女（教示者）はそれ（蛇）をただの地的な生き物として置き去りにした。　そして肉の（σαρκική）女はその木から取って食べた。また，彼女と共にいた夫にも与えた。[47] こうして，(15) 心魂的（ψυχικός）なる者たちは食べたのである。すると，彼らの邪悪さ（κακία）が彼らの無知から現れてきた。そして彼らは自分たちが霊的なもの（πνευματικόν）を剝がれて裸であることに気付いた。彼らは無花果の葉を取って，腰に纏った。[48]

§10　すると（τότε），彼，すなわちアルコーン（ἄρχων）たちの頭領がやってきて，(20) こう言った，「アダムよ，おまえは何処にいるのか」と。何故なら（γάρ），彼は何が起きたのか知らなかったからである。

すると，アダムは言った，「私はおまえの声を聞いた。私は裸であるために恐れ，身を隠したのだ。[49]」

そのアルコーン（ἄρχων）が言った，「(25) もしおまえが，私が『それ［か］らだけは食べてはならない』とおまえに命じておいたその木から食べたのではないとすれば（εἰ μή τι），何故おまえは隠れたのか。おまえはそれにもかかわらず食べたのだ。[50]」　アダムが言った，「おまえが私に与えたあの女が私に［与えたのだ。］（それで）私は食べたのだ。[51]」すると，傲慢な（αὐθάδης）(30) そのアルコーン（ἄρχων）は（その）女を呪った。

女は［言った］，「私を騙した（ἀπατᾶν）のは［蛇なのです。］（それで）私は食べました。[52]」

[32　　±8　　][53]蛇。[54] 彼らは彼の影 [33　　±8　　] を呪った。彼らには知ることができなかった。[34　　±7　] それが［彼らの］こしらえ物（πλάσμα）であることを。[54] その日以来，【91】蛇は支配者（ἐξουσία）たちの呪詛の下に置かれた。彼，すなわち，完全（τέλειος）なる人間が到来するまでの間，呪詛が蛇の上に下った。

彼らは彼らのアダムに向かった。彼らは彼を（5）その妻と共に楽園（παράδεισος）から追放した。[55] 何故なら，彼ら[56]には何一つ祝福がなく，彼らもまた呪いの下にあるからである。

さらに（δέ），彼ら（支配者たち）は人間たちを大いなる試練（περισπασμός）と生（βίος）の苦しみの中に投げ込んだ。それは彼らに属する人間たちが（10）生活の（βιωτικός）労苦に追われて[57]，聖霊（πνεῦμα）に心を配る（προσκαρτερεῖν）時間の余裕（σχολάζειν）がないようにする（ἵνα）ためであった。

§11　さて（δέ），これらのことの後，彼女は彼らの息子カインを産んだ。[58] 彼は地を耕す者であった。彼（アダム）は再び（πάλιν）妻を知った。彼女はまた身ごもり，アベルを産んだ。[59] そのアベルは(15)羊飼い，すなわち，牧畜者であった。さて（δέ），カインは彼の畑の実り（καρπός）を持ってきた。[60] 他方（δέ），アベルは彼の子羊を犠牲（θυσία）として持ってきた。[61] 神はアベルの供儀（δῶρον）に目を留めて，よしとした。しかし，カインの供儀（δῶρον）は（20）受け容れなかった。[62] すると肉の（σαρκικός）カインは弟のアベルを襲った（διώκειν）。[63]

そこで神はカインに言った，「おまえの弟アベルは何処にいるか。」

彼は答えて，言った，「私は私の弟の番人（φύλαξ）なのですか（μή）[64]。」

神は（25）カインに言った，「見よ，おまえの弟の血が私に向かって叫んでいる。[65] おまえはおまえの口によって［罪］[66]を犯した。それ（罪）はおまえに戻ってくるあろう。誰であれ，カインを殺す［者］は七［倍の］復讐［を］身に招くであろう。[67]
しかし（δέ），おまえは呻［き苦しみ］，（30）地の上で震えて過ごすだろう。[68]」

§12　さて（δέ），アダムは彼の双生の似像であるエヴァを［知った。］彼女は身ごもった。彼女はアダムに息子の［セーツ］[69]を産んだ。[70] そして言った，「私は［アベルの］代わりに，神によってもう一人の［別の］人間[71]を産んだ。」

再（πάλιν）びエヴァは身ごもった。彼女は［ノーレア］[72]を産んだ。（35）そして言った，「彼は私［に一人の【92】処］女を（[παρθέ]νος）人間たちの世代（γενεά）［から］世代（γενεά）への助け（βοήθεια）として産んだ。」[73] これはいかなる権力も（δύναμις）汚したことのない処女（παρθένος）である。

それから（τότε）人間たちは増え（αὐξάνειν）始め（ἄρχειν）[74]，善良な者になった。

§13　アルコーン（ἄρχων）たちは（5）互いに相談して言った，「集まれ，われわれは洪水（κατακλυσμός）を（われわれの）手で起こそう。そして，人間から獣に至るまですべての肉（σάρξ）なるものを滅ぼそう。[75]」

だが（δέ），もろもろの権力（δύναμις）の頭領（ἄρχων）[76]は，彼らのこの相談事に気付いたとき，ノアに言った，（10）「おまえは朽ちることのない木で一隻の船（κιβωτός）を造りなさい。

そして，その中におまえとおまえの息子たち，動物たち，天の鳥たちを，小さなものから大きなものまで，隠しなさい。[77] そして，おまえはそれをシルの山の上に置きなさい。」

§14　さて（δέ），オーレア[78]が（15）その船（κιβωτός）に乗り込むために，彼（ノア）のもとへやってきた。だが，彼は彼女に（そう）させなかった。彼女は船（κιβωτός）に向かって風を吹きつけ，それを燃やしてしまった。再び（πάλιν）彼は二隻目の船（κιβωτός）を造った。

§15　アルコーン（ἄρχων）たちが彼女を騙そう（ἀπατᾶν）として，彼女に会いに来た。（20）彼らの中の大いなる者が彼女に言った，「おまえの母，エヴァはわれわれのところにやって来たぞ。」
　しかし（δέ），ノーレアは彼らの方に向きを変えて，彼らに言った，「おまえたちは闇のアルコーン（ἄρχων）である。おまえたちは呪われている。おまえたちが私の母を知ったということもない（οὔτε）。むしろ（ἀλλά），おまえたちはおまえたちの双生の似像を知ったに過ぎない。（25）何故なら（γάρ），私はおまえたちの間から出た者ではなく，［むし］ろ，上なる領域からやって来た者であるから。」
　傲慢な（αὐθάδης）アルコーン（ἄρχων）の長は自分の権力に訴えた。［すると］彼の顔（πρόσωπον）はまるで黒い［火］[79]のようになった。彼は厚顔にも（τολμᾶν）彼女に迫って，（30）彼女に［言っ］た，「おまえはおまえの母エヴァの［ように］，われわれの言いなりになるべきだ。何故なら（γάρ），私には［　　±8　　］[80]が与えられたからである。

§16　だが（δέ），オーレア[81]は［光の］[82]力で向きを変えた。[83]［彼女は］大声で，聖なる方，万物の神に［向かって］叫んだ。[83]【93】「邪悪（ἀδικία）のアルコーン（ἄρχων）たちの手から私を助け出して（βοηθεῖν）ください。今すぐ私を彼らの手から救い出してください。」

§17　一人の天使（ἄγγελος）が天から地上にやって来て，彼女に言った，「何故おまえは神に向かって叫んでいるのか。（5）何故おまえは敢えて（τολμᾶν）聖霊（πνεῦμα）に訴えるのか。」

§18　ノーレアは言った，「あなたはどなたですか。」[84]
　邪悪（ἀδικία）のアルコーン（ἄρχων）たちは彼女から遠ざかった。彼は言った，「私こそエレレートである。知恵であり，大いなる天使（ἄγγελος）であり，（10）聖霊（πνεῦμα）の御前に立つ者である。私はおまえと語って，おまえをこれら不法（ἄνομος）な者たち手から救い出すために遣わされたのだ。今，私はおまえの根源について教えよう。」

§19　しかし（δέ），あの天使（ἄγγελος）の力を語ることは私[85]にはできないだろう。彼の姿は精選された（15）黄金のようであり，その着物は雪（χιών）のようである。[86] 何故なら（γάρ），私の口は彼の力と容貌を語ることには耐えられないであろうから。

§20　大いなる天使（ἄγγελος）エレレートが私に言った，「私は」　－　と彼は言った－「“理解”である。（20）私は見えざる（ἀόρατον）大いなる霊（πνεῦμα）の御前に立っている四つの光輝く

もの（φωστήρ）から出た者である。おまえはこれらのアルコーン（ἄρχων）たちの力がおまえの上にあると思っている。(しかし)彼らの誰一人として真理の根に逆らうことはできない。[87] (25) 何故なら(γάρ)，それ(真理)のためにこそ，彼は終わりの時(καιρός)に現れたのであるから。[87] それら[88]はこれらの支配者(ἐξουσία)たちの上に支配するだろう。そして，これらの支配者(ἐξουσία)たちには，おまえとあの種族（γενεά）を汚すことはできないだろう。何故なら（γάρ），おまえたちの住まい（μονή）[89]は“不滅性”[90]の中にあるからだ。すなわち，処女なる霊（παρθενικὸν πνεῦμα） ― (30) とはすなわち，混沌（χάος）[91]の支配者（ἐξουσία）たちと彼らの世界（κόσμος）を超越する霊 ― がそこにある場所に。」

§21 それに対して私は言った，「主よ，[これ]らの支配者（ἐξουσία）たちについて教えてください。すなわち，彼らは[どのようにして]生まれて来たのですか。(35)また，どのような本[質]（ὑπόστ[ασις]）からの者たちなのですか。[また，]【94】どのような素材（ὕλη）からの者たちなのですか。また，誰が彼らと彼らの力（δύναμις）を造ったのですか。」

§22 すると，彼，すなわち大いなる天使（ἄγγελος）エレレート，すなわち“理解”が私に言った，[92]「上なる終わりなきアイオーン（αἰών）には（5）“不滅性”が住む。ソフィア ― これはピステイ スと呼ばれる ― は彼女の伴侶を得ないまま，或るわざを遂げたいと欲した。そして彼女のそのわざ（ἔργον）は天に似たものとなった。

上なる天と (10) 下なるアイオーン（αἰών）の間には一つのカーテン（καταπέτασμα）がある。そして，(その) カーテン（καταπέτασμα）の下に一つの影が生じた。そしてその影が物質（ὕλη）となった。そしてその影は少し(μέρος)づつ投げ捨てられた。そして，彼女が造ったもの[93]は(15)物質（ὕλη）の中でまるで流産のようなわざ（ἔργον）となった。それ（わざ）は影から形（τύπος）を受け取った。それはライオンに似た傲慢な（αὐθάδης）獣（θηρίον）となった。それは，私がすでに述べた通り，男女（おめ）である。何故なら，それは物質（ὕλη）から出てきたものだからである。

§23 それ（獣）は目を (20) 開いた。彼は大いなる無窮の物質（ὕλη）を見た。そして高慢になって，言った，『私こそが神である。私の外には何者も存在しない』と。

彼はこう言った時に，万物に対して罪を犯したのである。さて（δέ），権威（αὐθεντία）の高みから或る声が到来して，(25) こう告げた，『おまえは誤っている（πλανᾶσθαι），サマエールよ』と。―とはすなわち，盲目の神という意味である。

§24 すると彼は言った，『もし私より先に他の者が存在するのならば，その者は私の前に現れよ』と。すると直ちにソフィアが彼女の指を伸ばし，(30) 物質（ὕλη）の中へ光をもたらした。そして彼女は混沌（χάος）の領域（μέρος）にまで，それ（光）を追って行き，再びまた［彼女の］光［へと］登って行った。再び（πάλιν）闇が［33/34±7 ］[94]物質（ὕλη）。

§25 男［女］（おめ）なるこのアルコーン（ἄρχων）は (35) 彼自身のために，一つの大いなる

アイオーン（αἰῶν），［無］窮の【95】大きさ（μέγεθος）を造り出［した。］さて（δέ），彼は自分に何人かの息子（子孫）を造ることを考えついた。彼は七人の息子を造り出した。彼らは彼らの[95]父と同じように男女（おめ）であった。

§26　そして彼は彼の息子たちに言った，（5）『私こそは万物の神である』と。
　すると，ゾーエー　－　とはすなわち，ピステイ ス・ソフィアの娘[96]－　が，こう叫んで，彼に言った，『おまえは間違っている（πλανᾶν），サクラスよ』　－　とはすなわ，訳せばヤルダバオートのことである。彼女は彼の顔に息を吹きつけた。すると，彼女の息は（10）彼女のために火のような天使（ἄγγελος）となった。そして，その天使（ἄγγελος）がヤルダバオートを縛り上げ，タルタロス（Τάρταρος）へと，深淵の底へ投げ捨てた。[97]

§27　だが（δέ），かれの息子のサバオートはその天使（ἄγγελος）の力（δύναμις）を見ると，（15）悔い改めた（μετανοεῖν）。彼は彼の父と彼の母　－　とはすなわち物質（ὕλη）のこと　－　を謗った（καταγινώσκειν）。

§28　彼は彼女を忌み嫌った（σικχαίνειν）。しかし（δέ），ソフィアと彼女の娘ゾーエーに向かっては賛美を捧げた（ὑμνεῖν）。するとソフィアとゾーエーが彼を捕らえて引き揚げ，（20）カーテン（καταπέτασμα）の下側の上方と下方の間にある第七の天に据えた（καθιστάναι）。そして彼女たちは彼を諸力（δύναμις）の神サバオートと呼んだ。何故なら，彼は混沌（χάος）の諸力（δύναμις）の上に君臨しているからである。（25）ソフィアが彼をそのように据えた（καθιστάναι）からである。

§29　さて（δέ），これらのことが生じたので（ὅτι），彼（サバオート）は自分のために一つの大きな車（ἅρμα）を，すなわち，四つの顔（πρόσωπον）をしたケルビムを造った。侍従（ὑπηρετεῖν）する無数の天使（ἄγγελος）たちと（30）竪琴（ψαλτήριον）とリラ（κιθάρα）も添えて。
　そしてソフィアは彼女の娘ゾーエーを捕らえると，彼の右に座らせ，彼に“オグドアス”の［中に］在るものについて教えるようにした。また，彼女は［怒］り（［ὀρ］γή）[98]［の］天使（ἄγγελος）を（35）彼の左に据えた。その［日以来，彼の右手］は【96】ゾーエーと呼ばれた。そして，左手は上なる領域の専横者（αὐθεύτης）の邪悪さ（ἀδικία）の範型（τύπος）となった。それらはそれら（右手と左手）よりも前に成ったものである。[99]

§30　だが（δέ），ヤルダバオートは，（5）彼（サバオート）がこのような大いなる栄光と高みにいるのを見たとき，彼を妬んだ。そして，その妬みは一つの男女（おめ）なるわざ（ἔργον）となった。そして，まさにこれが嫉妬の始め（ἀρχή）であった。そして嫉妬が死を産んだ。さらに（δέ）死が息子たちを産んだ。彼（死）は息子のそれぞれを（10）それぞれの天に据えた（καθιστάναι）。混沌（χάος）のすべての天が彼らの数で満たされた。
　しかし（δέ），これらすべてのことは万物の父の意志において，上なるすべての天の領域の範型（τύπος）に従って（κατά），生じたのである。こうして（ἵνα），混沌（χάος）の数（ἀριθμός）

が完全になった。[100)]

§31　(15) さあ，(以上で) 私はおまえに，アルコーン (ἄρχων) たちの範型 (τύπος) と，それがその中で生まれた物質 (ὕλη) と彼らの父と彼らの世界 (κόσμος) について教えたことになる。」[101)]

§32　そこで (δέ)，私は言った，「主よ，私自身も物質 (ὕλη) に属する者ではないでしょうか (μή τι)。」

§33　「おまえ (二人称・女性・単数) とおまえの息子たちは (20) 初めから在る父に属している。おまえの魂 (ψυχή) は天の領域から，不滅の光からやって来たのである。この故に (διὰ τοῦτο)，支配者 (ἐξουσία) たちは彼らに近づくことができないであろう。彼らの中に住んでいる真理 (ἀλήθεια) の霊 (πνεῦμα) の故に。(25) 他方 (δέ)，この道 (ὁδός) を認識した者は誰でも，死ぬべき人間たちの間にあっても，不死 (ἀθάνατος) なる者たちである。しかし (ἀλλά)，あの種子 (σπέρμα)[102)] は今はまだ現れないであろう。

§34　むしろ (ἀλλά)，三世代 (γενεά) の後に現れるであろう。(30) 彼は彼らを支配者 (ἐξουσία) たちの過ち (πλάνη) の呪縛から救い出した[103)]。」

§35　しかし (δέ)，私は言った，「主よ，なおどれほどの期間 (χρόνος) そうなのですか。」

§36　彼は私に言った，[104)]「真 [実なる] (ἀληθι[νός]) 人間が，造られたもの (πλάσμα) の形で，(35) [真] 理 ([ἀ]λήθεια) [の霊 (πνεῦμα) を現] す [と] き ([ὅ]ταν) までである。それ (真理の霊) は父が【97】遣わしたもの[105)]である。[104)]

§37　そ[のときには] (τ[ότε])[106)]，それ (真理の霊) があらゆることについて教えるであろう。[107)] そして，それは永遠の生命 － これは王なき世代 (γενεά) からそれに与えられたものである － の塗油 (χρῖσμα) によって彼らを塗油するであろう。

§38　(5) そのときには (τότε)，彼らは盲目の考えを取り去られるであろう。そして，支配者 (ἐξουσία) たちを踏みにじって (καταπατεῖν)，滅ぼすであろう。そして，無窮の光へと昇ってゆくであろう。それ (無窮の光) こそがこの種子 (σπέρμα) がそこにある場所である。

(10) そのとき (τότε)，支配者 (ἐξουσία) たちは彼らの時 (καιρός) を失うであろう。そして，彼らの天使 (ἄγγελος) たちは彼らの滅亡を嘆き悲しむであろう。[108)] そして，彼らの悪霊 (δαίμων) たちは彼らの最期を嘆くであろう。

§39　そのとき (τότε)，すべての光の子たち[109)]は本当に真理 (ἀλήθεια) と (15) 自分たちの根源と万物の父と聖霊 (πνεῦμα) とを知るであろう。彼らはすべて声を一つにして言うであろう，

『父の真理（　　）は義（　　）である。そして御子は万物の上にあり，あらゆるものを貫いている。[110] (20)永遠から永遠まで。聖（　　）なるかな，聖（　　）なるかな，聖（　　）なるかな，アーメン』と。」

アルコーン（　　）の本質（　　）

注

(1) コロ1,13参照。直前の「偉大な使徒」とはパウロを指す。

(2) [cno]f と復元（S,Bl, Kr, Br)。

(3) エフェ6,12参照。

(4) L^3と Br に従って，[aei]tschene と復元する読み。Sは「[私が]これを著[したのは]」，N^2は「[私が] これを明らかに [したのは]」，Kr は「[君が] この点について [なお曖昧でいるのは]」，Ka^1 (Ka^2,p.26) は「彼ら（世の支配者たちと邪悪の霊力）は闇 [の中にいる]」。Bl は復元を断念している。

(5) te[f]com と復元（S,Bl, Kr, L^3, Br)。

(6) [min tefmi]nttschasichet と復元（S,Bl, Kr, Br, L^3)。

(7) S,Bl, L3 , Br と共に [etbe] と復元。 Kr と Ka^1 (Ka^2,p.27) は [chin]=「中で」。

(8) L^3と Br の復元(tef[com tsche])。Sは「言葉」(aspe)，N^2は「口」(tapro)，Kr は「声」(sme) ，Ka は「忘却」(obschis) 。

(9) 大多数の校訂者と共に[atschint int]apeftsche と復元。

(10) イザ46,9他参照。

(11) [epterif] と復元（Bl, Kr, L^3, Br)。Sは「不死なる方」。

(12) Kr と Ka1 (Ka^2,p.28) は完了形（tsch[e] akir planasthe) に読んで，「誤った」。

(13) ir bille の訳。S，Bl, Kr は状態的に「盲目であった」。

(14)〜(14) 構文の解釈が困難な箇所。本文に示した訳は「深淵」がサマエールの「母」，つまり彼がそこで生まれた場所という意味。Bl は「彼はその後を追って，カオスと深淵にまで下って行った。すなわち，それ（深淵）はピステイ ス・ソフィアによる彼の母のことである。」，S,Kr, Ka^1 (Ka^2,p.28)，$L^{1,2,3}$，Br は「彼はその後を追って，カオスと彼の母なる深淵にまで下って行った。すなわち，ピステイ ス・ソフィアの教唆によって。」，Fは87,6の「追って行った」の主語の三人称・男性・単数 (afdioke) を不特定多数を表す三人称・複数（audioke) に読み換えて，Man verfolgte ihn (Jaldabaoth) bis in den Chaos und den Abgrund, der seine Mutter ist, auf Veranlassung der Pistis Sophia.

(15) 不可視の神々の世界（プレーローマ，§29：“オグドアス”）が可視的存在（ピステイ ス・ソフィアの息子である支配者たち）のモデルになっているという意味。文言についてはマタ10,26 ；トマ10参照。なお，以上の§2-3 (86,26-87,11) は内容的に，後続の§22-26 に物語られる神話の要約になっている（Fによる)。

(16) ヨハ3,31参照。

(17) 創1,26; 2,7 参照。

(18) Ka^1(Ka^2,p.28)，L^3，Br と共に plasse impouta[mio] と復元。S，Bl, Kr は plasse imps[ô]-m [a]=「[身] 体を造ったが」，N^2は plasse impo[upome] =「[人間] を造ったが」と復元。

(19)〜(19) 構文の解釈が困難な箇所。本文に示した訳はSと Bl に従い，d [e psô] ma peteintauf 〈oute (　　) 〉inschime out[e (　　) chout]と復元するものであるが，相関否定詞の第一項〈　　〉の欠落（書き落とし）を想定しなければならないのが難点である。F (S.126) は Bl のこの構文解釈の後半を ouch [out] inschime と修正して，「彼ら（=アルコーンたち） の [身] 体は男女（おめ=両性具有）であった」と訳す。Br と Kr は同じ部分を inschime ouch[ouche]と復元して，「彼

らの［身］体は女のそれであり，出来［損ない］で，獣の顔をしていた」。

(20) 大多数の校訂と共に a[mêitin]と復元。

(21) 後続の注24）を付した「それ」(87,35) と同様，三人称・男性・単数の人称代名詞であるが，指示対象が不分明。注24）参照。

(22) Bl は Finalis ([inta]rintechof)，L^3と Br は Optativ ([ma]rintechof) に復元するが，意味上は大差がない。

(23) 後続の注25）を付した「ためである」と合わせて±7文字分の復元 (87,34)。

(24) 前出注21）を付した「彼」(87,34) と同じ事情。文脈上はどちらも「神の像」(87,31-32) を指すと解するのが最も自然。この場合，直後の「彼の双生の［像］」は「こしらえ物」(87,34) を指すことになり，全体の文意は，万物の父である至高の神が自分の模像（こしらえ物）を見て，それに近づいてくるようにしよう，というアルコーンたちの策略を意味することになる。S，Kr, Br も同様の解釈。

(25) 前出注23）参照。

(26) 創2,7 参照。

(27) ギリシア語としては「鋼鉄の」，「不屈の」，「堅固な」の意味の形容詞。Fは「天」の意味に解する。『この世の起源について』(NHC II,5) §46 (108,20-24) にも同じ語が出る。

(28) 創2,7 参照。　(29) 創2,19参照。　(30) 創2,15参照。

(31) 創2,16-17 参照。

(32)〜(32) 本文の復元が困難な箇所。われわれの訳はほぼ Bl の復元に準じる。$L^{1,2,3}$は第33行の欠損の復元は断念しているが，第34行の±8文字分の欠損は「[彼らが] 彼に［言った］ことが何なのか」と復元する。S，Kr, Br は「彼らは［彼に］こう［言った。］（しかし） 彼らは彼に［言ったこ］とが何なのか知らなかった。」

(33)〜(33) 構文の解釈が困難な箇所。原文は inteadam nau eroou efo têrif inchylikos. Bl は efo（三人称・男性・単数を主語とする付帯状況文） を efou（三人称・複数を主語とする付帯状況文）に読み換えた上で，「そして彼らが物質的であることをアダムが見るためであった。」S と F (S.126) は efop[ou] inchylikos と校訂して「アダムが彼らを物質的な者たちと見［做す］ようになるためであった。」L^3は inteadam〈tim 〉nau ... と否定の接続法に復元して，「アダムが全く物質的な人間がするのと同じような見方で彼らを見〈ないように〉するためであった。」われわれの訳は Ka^1 と Br の構文解釈と同じ。

(34)〜(34) $L^{1,2,3}$は独自の構文解釈に基づき，「“彼らが彼の上にもたらすと，彼は眠った”とある忘却とは無知のことである」と訳し，全体を挿入文とする。

(35) 創2,21a 参照。

(36) 文意が不自然な箇所。F (S.126) は「彼らは彼の脇腹 (cpir) を開いた。〈そして彼の肋骨 (betcpir) を〉生ける女に変えた。」というのが元来の文章であったものが，“cpir”と“bêtcpir”の間の Homoioteleuton （行末類似） の所為で〈　　〉部が脱落したことによって損なわれている想定する。

(37) 創2,21b 参照。　(38) 創3,20参照。

(39)〜(39) S,Bl, Kr と共に asirousch[ê] intootou と復元。N^2 ,F,L^3, Br は asirouschê(n) intootou と復元して，「彼女は彼らの手の中にあって樹になった」。確かに『この世の起源について』(NHC II,5) §91 (116,28-32) にはこの復元の方がよく並行するが，性交をめぐって展開する文脈には前者の復元の方がよく適合する。

(40) e[oui]n[e]と復元（S と Bl)。F,Kr, L^3, Br は e[s]eine と復元し，「影」を先行詞とする関係文として，「彼女に似た影を」。

(41) autschochim[ou ch]in ousôf と復元（S,Bl）。F,Kr, L[3], Br は autschochim[es ch]in ousôf と復元し，「それ（三人称・女性・単数＝「影」）をひどく汚した」。

(42) 創3,1 参照。 (43) 創3,2 参照。 (44) 創3,3 参照。

(45) 創3,4 参照。 (46) 創3,5 参照。 (47) 創3,6 参照。

(48) 創3,9 参照。 (49) 創3,10参照。 (50) 創3,11参照。

(51) 創3,12参照。 (52) 創3,13参照。

(53) Kr は「[彼らは] 蛇のもと [へやって来た]」， S，Ka, L[1,2,3], Br は「[彼らは] 蛇の方に [向きを変えた]」。

(54)〜(54) 復元が困難な箇所。Bl は復元を断念している。S は「[彼らは] それ（蛇）が無力な者 [となるように]，その（蛇の）影を呪った。というのも，彼らは [彼らの] こしらえ物が [何であるのか] を知らなかったからである。」（Kr もほぼ同じ），Ka[1]（Ka[2],p.30）は「彼らは彼の影を呪った。[－このこと] は無力（のわざ）であった。－彼らは，[それが（単に）彼らの] こしらえ物に過ぎないことを知らなかった。」，L[1,2,3]は「彼らはそのぼんやりした影像を呪った。[33] 無力で，それが彼ら自身のこしらえ物に他ならない [ことを] 悟らなかった。」Br は「彼らはそれが無力な者 [となるように]，その（蛇の）影を呪った。というのも，彼らはそれが [彼ら自身の] こしらえ物（に他ならない）ことを知らなかったからである。」

(55) 創3,23参照。

(56) おそらく直前の「アダム」と「その妻」を指す。

(57) 創3,16-19 参照。

(58) 創4,1 参照。 (59) 創4,2 参照。 (60) 創4,3 参照。

(61) 創4,4 参照。 (62) 創4,5 参照。 (63) 創4,8 参照。

(64) 創4,9 参照。 (65) 創4,10参照。

(66) L と Br に従い，akir n [o] be inrok と復元。

(67) 創4,15参照。 (68) 創4,12参照。

(69) Kr, L[1,2,3], Br による復元。S と Bl は [in ouschêre]＝「一人の息子を」と復元するが，欠損スペース（± 5 文字）に対して長すぎる。Ka[1]（Ka[2],p.30）は N[2] と共に，内容的には同じだが，astsch [pe schêre] と復元。

(70) 創4,25参照。

(71) Ka[1]（Ka[2],p.30）は「私は... [この] 人間を産んだ。」

(72) ± 7 文字分の欠損。S と Bl は astsch[po inouscheere]＝「[一人の娘を産] んだ」と復元するが，欠損スペースに対して長すぎる。内容的に同じ復元としては N[1] と Ka[1]（Ka[2],p.30）の提案 astsch[pe scheere] の方に蓋然性がある。ただし Ka[1], p.177f の仮説では，われわれの文書の最終編集者は目下の箇所の“一人の娘”を後続の§14の“オーレア”および§15の“ノーレア”と同定している。

(73) S は「彼は私に [一人の処女を] 助け手として産んだ。[そして] すべての世代はこの処女の中にいるのである。」

(74) 創6,1 参照。 (75) 創6,7 参照。

(76) S（S.70f ）は造物神サマエール（ヤルダバオート，サクラス）と区別された“義の神”としてのサバオート（§27-30 参照）と同定する。

(77) 創6,14.18-20参照。

(78) “オーレア”（Ôrea）は§15に出る“ノーレア”（Nôrea）と同じ。ナグ・ハデイ 文書の中では，『ノレアの思想』（NHC IX,2）と『この世の起源について』（NHC II,5）の§18（102,10-11），§20（102,24-25） にも言及がある。それ以外にも，エイレナイオス『異端駁論』I,30,9が報告するセーツ派（オフィス派）のグノーシス主義では，ノーレアがセーツの妹であると同時に妻として，また，同じセー

ツ派についてのエピファニオス（『薬篭』39,5,2）の報告では，“オーライア”の名でやはりセーツの妻として現れる。しかし，これと並んで，エピファニオス（『薬篭』26,1,3-5）が報告するニコライ派とマンダ教（GinzaR, Lidzbarski S.46,l.4：“Nuraita”）など，ノーレア（その別表記も含む）をノアの妻と見做したグノーシス主義グループも存在する。特にニコライ派は，エピファニオスの報告によると，ノーレアを“　　”と表記し，これを“火”を意味するアラム語（nûra）と掛け合わせることによって，“　　”＝ノーレアをギリシア神話における洪水伝説のピュルハ（Pyrrha, 元来の語義では“火”を意味し，神話上ではデウカーリオンの妻）に比定したという。さらに，その“　　”は夫のノアがこの世の支配者であるアルコーンに仕えたのに対して，超越的な神バルベロに仕える存在であり，ノアが造った方舟に立ち入りを拒まれると，三度までもそれを焼き払ったという。われわれの文書の目下の§14は，“オーレア”がノアの妻であるとは明言していないものの，ほぼ同じ構図で読まれるべきであろう。他方，先行する§12の復元が正しければ，そこではノーレアはセーツと共に，アベルが殺害され，カインが追放された後に（§11参照）アダムとエヴァが改めて設けた最初の兄妹である。従って，ノーレアはセーツの妹であると同時に不可避的に妻でもあるという含みになって，むしろ上述のセーツ派の観念に並行する。つまり，われわれの文書の§12-14 では，ノーレアに係わる二つの神話的観念が踵を接して並列されているわけである。

Nôrea あるいは Ôrea という名前の表記そのものの起源については，前述のニコライ派による語呂合わせに始まって，古来多くの仮説が提出されてきた。その中で最も周到なものは，この問題を集中的に取り上げた B.A.Pearson, The Figure of Norea in Gnostic Li-terature, in: Proceedings of the International Colloquium on Gnosticism Stock-holm August 20-25,1973, Stockholm 1977, 143-152 による説明である。それによれば元来の起源はユダヤ教のハガダー伝承に求められる。そこでは Na‘amah という女性名がやはり一方ではセーツの妹かつ妻であり，他方ではノアの妻として言及されるばかりではなく，ノアの箱舟の建設を妨げ，天使をも誘惑する悪女とする見方が優勢である。また，Na‘amah は元来「快適な」，「魅惑的な」の意味のヘブル語の形容詞であって，ギリシア語におけるそれと等価の形容詞（　　）を女性の固有名詞の形にするととなる。ここから“オーレア”（Ôrea）の表記が，さらにその語頭に Na’amah の頭文字のNが付加されて“ノーレア”（Norea ）の表記が生じた。ただし，前述のグノーシス主義の神話はこの悪女をプラスの存在に，逆にノアをマイナスの存在に価値転倒させながら受容している。

(79) S,F,Kr の復元 [oukô]cht による。Bl は [cala]cht efkêm ＝「黒い［壷］」と復元するが，文法的に困難（F,S,126)。

(80) 多くの訳者が復元を断念している箇所。Sは「栄誉」，Ka[1]（Ka[2],p.31） は「これも」と復元するが，文意がうまく通らない。

(81) 本文を Bl は ôrea, S，Kr, Ka[1]（Ka[2],p.31)，L3 ，Br は Nôrea と読む。

(82) Bl の復元 [ouoein assch]kak に従う。S，N[2]，Kr は「[神の] 力に」，Ka は imp[pna asa] schkak＝「[霊の] 力へ向きを変えた」。

(83)〜(83) 本文に示した復元はL1,2,3 と Br による。S,Bl, Kr, Ka[1]は「[彼女は] 大声で叫んで，聖なる方，万物の神に向かって［言った]。」

(84) 使行9,5 参照。

(85) この「私」(93,13) を§18までの“ノーレア”と同定してよければ，この箇所（§19）以後の地の文は“ノーレア”が一人称単数で語るものとなる。この問題に関連する資料仮説については解説の２），３）項を参照。

(86) マコ9,3 および並行箇所。

(87)〜(87) Br はこの三人称・単数・男性（「彼」）を主語とする文章を挿入文と見做す。

(88) 先行する「四つの光輝くもの」を指す（S，Bl, Kr も同様の解釈)。L[1,2,3]と Br は不特定多数を指

す三人称複数と見做して，全体を受動態に訳す，「これらの支配者たちは支配されるだろう。」

(89) ヨハ14,2-3参照。

(90) Ka[1],p.170は擬人的よりも場所的な意味に取る解釈に傾く。

(91) 本文が不鮮明で判読が困難な箇所。SとN[2]は「闇の」。

(92) 以下§31までエレレートの直接話法。

(93) 94,14 の pecmououg を三人称・女性・単数の所有接頭辞 pec と名詞 mououg （＝mounik の別形） に分解する訳（Ka[1]Ka[2],p.33, L[3], Br)。男性定冠詞 pe と名詞 cmouout（cmot の別形）に分解すれば，「彼の形姿」となる（S,N[2], Kr）が，文意がうまく通らない。Bl はコプト語本文を pec［mou］oug と校訂しながら，英語の対訳は pecmout（＝cmouout,cmot）を訳したものになっており，首尾一貫しない。

(94) Sは「再び闇が物質と［結合した］」，N[2]は「再び闇が物質と［混じり合った］」，Ka[1]（Ka[2],p.33）は「再び闇が物質の中［に生じた］」。

(95) Ka[1]（Ka[2],p.33）は「彼らの」に代えて「おまえの」（二人称・女性・単数）と訳し，語り手のエレレートが聞き手の“ノーレア”を指しているものと解することも可能とする。

(96) §22-23 によれば，サマエール（サクラス，ヤルダバオート）もピステイス・ソフィアの息子であるから，ゾーエーはその姉妹に当たる（Ka[1], p.179）。

(97) ヨハ黙20,1-3参照。

(98) Ka[1]（Ka[2],p.33f)，L[3]，Br の復元に従う。SとN[2]は「［火の］天使」

(99) 正確な文意が取りにくい箇所。特に主語の三人称複数「それら」の指示先が不明瞭。「それら（右手と左手）よりも」の部分は文法的には「おまえ（＝ノーレア）よりも」と訳すことも可能（L[1,2,3]）。

(100) ヨハ黙6,11参照。Bulllard（L[3]に付した序文 p.222,n.4）は96,11-14の段落全体の背後に，“形相の充満”(plenum formarum) を神には“妬み”がないことから導出する新プラトン主義の理論が前提されている可能性を認める。

(101) §22（94,4）からここまでエレレートの直接話法（注92参照）。

(102) S（s.78）は創3,15の「女の子孫」を暗示するものと見て，救済者の意味に解する。

(103) 現在完了第1形（afnoutsche）に読む訳（Bl, Ka, L[3]）。Br は接続法 nifnoutsche に修正する読みを採用して，前文と同様に未来形で訳す（S, L[1,2]も同様）。

(104)〜(104) L，Br の構文解釈に従う。S，Bl, Kr, Ka[1]は「真［実なる］人間が造られたものの形で［現れる時］までである。真理［の霊］は父が送ったものである。」

(105) ヨハ14,16-17.26 参照。

(106) L[3]と Br の復元。

(107) ヨハ14,26; 16,13参照。

(108) ヨハ黙18,11.19参照。

(109) ヨハ12,36 ；エフェ5,18；1テサ5,5 参照。

(110) エフェ4,6 参照。

Das Wesen der Archonten (NHC II,4)
- eine japanische Übersetzung mit Anmerkungen -

von Takashi Onuki

"Das Wesen der Archonten" ist im zweiten Codex von Nag-Hammadi als dessen vier-te Schrift enthalten. Hier wird funfzig Jahren nach dem Fund der Nag-Hammadi-Co-dices die erste durchgehende Übersetzung der Schrift ins Japanische vorgelegt. Grundlage fur Übersetzung bildet die Textausgabe: "The Hypostasis of the Archons", in : B.Layton (ed.), Nag Hammadi Codex II,2-7, vol.1, Leiden 1989 (NHS XX),pp.219-259. Daneben werden auch R.A.Bullard, The Hypostasis of the Archons, Ber-lin 1970 (PTS 10) und B.Barc, L'Hypostase des Archontes, Quebec/Louvain 1980 (BCNH 5) stets berucksichtigt. An mehreren Stellen werden jedoch andere Lesungen und Übersetzungen vorgezogen. Sie sind alle mit Begrundungen jeweils in Anmer-kungen angegeben. In Anmerkungen erfolgen auch Auseinandersetzung mit anderen bereits vorliegenden Übersetzungen in europaische Sprachen von H.-M.Schenke (1960), P.Nagel (1969), M.Krause (1971), R.Kasser (1972) und B.Layton (1987). Der Übersetzung ist ferner eine Einleitung vorausgeschickt, die (1) den Codex, (2) Literarische Form, Inhalt und Aufbau der Schrift, (3) Quellen und Redaktion, (4) Stellung innerhalb des antiken Gnostizismus, (5) Abfassungszeit, -ort und Ursprache erklart.